

四面体の切断と体積【カバリエリの原理】

四面体 ABCD は AC=BD, AD=BC を満たすとし, 辺 AB の中点を P, 辺 CD の中点を Q とする。

- (1) 辺 AB と線分 PQ は垂直であることを示せ。
- (2) 線分 PQ を含む平面 α で四面体 ABCD を切って 2 つの部分に分ける。このとき, 2 つの部分の体積は等しいことを示せ。

< '18 京都大 >

【戦略 1】

座標・幾何・ベクトルなどの分野の選択が考えられますが, (1) はとりあえずベクトルを用いて (内積)=0 を目指したいと思います。

(2) は (1) に引き続きベクトルの路線で考えて行きますが, やがて限界が訪れます。

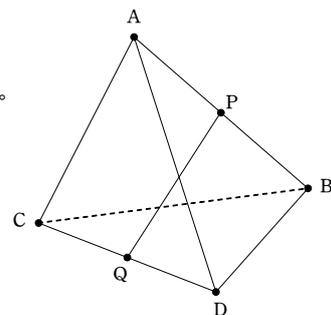
AS : SD = BR : RC = t : 1-t という関係が導けたら, ベクトルはお役御免で, 辺の比を把握して全体の体積を V とした体積比を考える方向に走りたいところです。

【解 1】

- (1) $\overrightarrow{AB}=\vec{b}, \overrightarrow{AC}=\vec{c}, \overrightarrow{AD}=\vec{d}$ とおく。

$$\overrightarrow{AP}=\frac{1}{2}\vec{b}, \overrightarrow{AQ}=\frac{1}{2}\vec{c}+\frac{1}{2}\vec{d}$$

$$\begin{aligned} \overrightarrow{PQ} &= \overrightarrow{AQ} - \overrightarrow{AP} \\ &= -\frac{1}{2}\vec{b} + \frac{1}{2}\vec{c} + \frac{1}{2}\vec{d} \end{aligned}$$



$$\begin{aligned} \overrightarrow{PQ} \cdot \overrightarrow{AB} &= \left(-\frac{1}{2}\vec{b} + \frac{1}{2}\vec{c} + \frac{1}{2}\vec{d}\right) \cdot \vec{b} \\ &= -\frac{1}{2}|\vec{b}|^2 + \frac{1}{2}\vec{b} \cdot \vec{c} + \frac{1}{2}\vec{b} \cdot \vec{d} \dots (*) \end{aligned}$$

条件より, $|\overrightarrow{AC}|^2 = |\overrightarrow{BD}|^2$ で, $|\vec{c}|^2 = |\vec{d} - \vec{b}|^2$

$$|\vec{c}|^2 = |\vec{b}|^2 + |\vec{d}|^2 - 2\vec{b} \cdot \vec{d} \Leftrightarrow \vec{b} \cdot \vec{d} = \frac{|\vec{b}|^2 + |\vec{d}|^2 - |\vec{c}|^2}{2}$$

また, 条件より, $|\overrightarrow{AD}|^2 = |\overrightarrow{BC}|^2$ で, $|\vec{d}|^2 = |\vec{c} - \vec{b}|^2$

$$|\vec{d}|^2 = |\vec{b}|^2 + |\vec{c}|^2 - 2\vec{b} \cdot \vec{c} \Leftrightarrow \vec{b} \cdot \vec{c} = \frac{|\vec{b}|^2 + |\vec{c}|^2 - |\vec{d}|^2}{2}$$

これらを (*) に代入すると

$$\begin{aligned} \overrightarrow{PQ} \cdot \overrightarrow{AB} &= -\frac{1}{2}|\vec{b}|^2 + \frac{1}{2} \cdot \frac{|\vec{b}|^2 + |\vec{d}|^2 - |\vec{c}|^2}{2} + \frac{1}{2} \cdot \frac{|\vec{b}|^2 + |\vec{c}|^2 - |\vec{d}|^2}{2} \\ &= -\frac{1}{2}|\vec{b}|^2 + \frac{1}{4}|\vec{b}|^2 + \frac{1}{4}|\vec{d}|^2 - \frac{1}{4}|\vec{c}|^2 + \frac{1}{4}|\vec{b}|^2 + \frac{1}{4}|\vec{c}|^2 - \frac{1}{4}|\vec{d}|^2 \\ &= 0 \end{aligned}$$

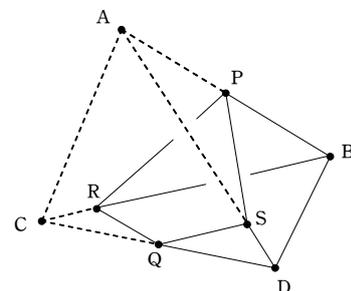
となり, 辺 AB と線分 PQ は垂直であることが示された。

- (2) α の切り口のうち, P, Q 以外の頂点を R, S とする。

R と S は $\begin{cases} \text{辺 AD, BC 上} \\ \text{辺 AC, BD 上} \end{cases}$

のいずれかであるが, 条件の対称性よりどちらで考えても構わない。

よって,
R が辺 BC 上, S が辺 AD 上のときを考えれば十分である。



(図 1)

AS : SD = t : 1-t, BR : RC = s : 1-s とおくと

$$\overrightarrow{AS}=t\vec{d}, \overrightarrow{AR}=(1-s)\vec{b}+s\vec{c}$$

P, Q, R, S は同一平面上ゆえ $\overrightarrow{PS}=k\overrightarrow{PQ}+\ell\overrightarrow{PR}$ とおける。

$$\begin{aligned} \vec{AS} - \vec{AP} &= k(\vec{AQ} - \vec{AP}) + l(\vec{AR} - \vec{AP}) \\ \Leftrightarrow \vec{AS} &= (1-k-l)\vec{AP} + k\vec{AQ} + l\vec{AR} \\ \Leftrightarrow t\vec{d} &= (1-k-l) \cdot \frac{1}{2}\vec{b} + k\left(\frac{1}{2}\vec{c} + \frac{1}{2}\vec{d}\right) + l\{(1-s)\vec{b} + s\vec{c}\} \\ &= \frac{1-k+l-2sl}{2}\vec{b} + \frac{k+2sl}{2}\vec{c} + \frac{k}{2}\vec{d} \end{aligned}$$

$$\vec{b}, \vec{c}, \vec{d} \text{ は 1 次独立であるから, } \begin{cases} 1-k+l-2sl=0 \dots \textcircled{1} \\ k+2sl=0 \dots \textcircled{2} \\ \frac{k}{2}=t \dots \textcircled{3} \end{cases}$$

①+②より $1+l=0$ で、 $l=-1$ を得る。

これを ② に代入すると、 $k-2s=0$ で、 $k=2s$

これを ③ に代入すると $s=t$ を得る。

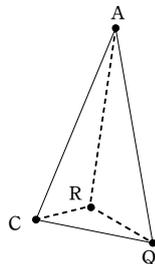
これより、 $AS:SD=t:1-t$ 、 $BR:RC=t:1-t$

四面体 ABCD の体積を V としたとき、
(図 1) の点線部分の立体の体積が

$\frac{1}{2}V$ であることを示せばよい。

四面体 ACRQ の体積を V_1 とすると

$$\begin{aligned} \frac{V_1}{V} &= \frac{\frac{1}{3} \cdot \triangle CRQ \cdot h}{\frac{1}{3} \cdot \triangle BCD \cdot h} \quad (h \text{ は頂点 A と平面 BCD との距離}) \\ &= \frac{\triangle CRQ}{\triangle BCD} \\ &= \frac{\frac{1}{2} \cdot CQ \cdot CR \cdot \sin \theta_1}{\frac{1}{2} \cdot CD \cdot CB \cdot \sin \theta_1} \quad (\angle BCD = \theta_1 \text{ とおいた}) \\ &= \frac{CQ}{CD} \cdot \frac{CR}{CB} \\ &= \frac{1}{2} \cdot \frac{1-t}{1} \\ &= \frac{1-t}{2} \end{aligned}$$

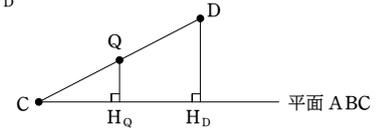
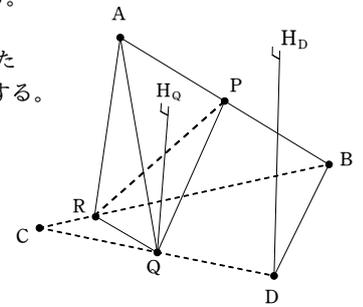


ゆえに、 $V_1 = \frac{1-t}{2}V \dots \textcircled{1}$

四面体 ARQP の体積を V_2 とする。

点 Q, D から平面 ABC に下ろした垂線の足をそれぞれ H_Q, H_D とする。

$$\begin{aligned} \frac{V_2}{V} &= \frac{\frac{1}{3} \cdot \triangle ARP \cdot QH_Q}{\frac{1}{3} \cdot \triangle ABC \cdot DH_D} \\ &= \frac{\triangle ARP}{\triangle ABC} \cdot \frac{QH_Q}{DH_D} \\ &= \frac{\frac{1}{2} \triangle ARB}{\triangle ABC} \cdot \frac{QH_Q}{DH_D} \\ &= \frac{\frac{1}{2} \cdot \frac{1}{2} \cdot BR \cdot BA \cdot \sin \theta_2}{\frac{1}{2} \cdot BC \cdot BA \cdot \sin \theta_2} \cdot \frac{QH_Q}{DH_D} \\ &= \frac{1}{2} \cdot \frac{BR}{BC} \cdot \frac{QH_Q}{DH_D} \\ &= \frac{1}{2} \cdot \frac{t}{1} \cdot \frac{1}{2} \\ &= \frac{t}{4} \end{aligned}$$

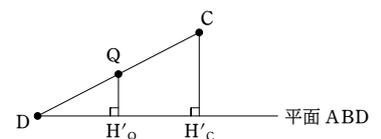
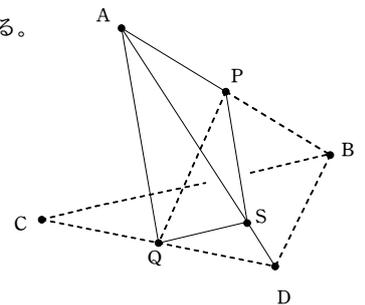


ゆえに、 $V_2 = \frac{t}{4}V \dots \textcircled{2}$

四面体 AQSP の体積を V_3 とする。

点 C, Q から平面 ABD に下ろした垂線の足をそれぞれ H'_C, H'_Q とする。

$$\begin{aligned} \frac{V_3}{V} &= \frac{\frac{1}{3} \cdot \triangle APS \cdot QH'_Q}{\frac{1}{3} \cdot \triangle ABD \cdot CH'_C} \\ &= \frac{\triangle APS}{\triangle ABD} \cdot \frac{QH'_Q}{CH'_C} \\ &= \frac{\frac{1}{2} \cdot AS \cdot AP \cdot \sin \theta_3}{\frac{1}{2} \cdot AD \cdot AB \cdot \sin \theta_3} \cdot \frac{QH'_Q}{CH'_C} \\ &= \frac{AS}{AD} \cdot \frac{AP}{AB} \cdot \frac{QH'_Q}{CH'_C} \\ &= \frac{t}{1} \cdot \frac{1}{2} \cdot \frac{1}{2} \\ &= \frac{t}{4} \end{aligned}$$



ゆえに、 $V_3 = \frac{t}{4}V \dots \textcircled{3}$

したがって (図 1) の点線部分の体積は

$$\begin{aligned} V_1 + V_2 + V_3 &= \frac{1-t}{2}V + \frac{t}{4}V + \frac{t}{4}V \\ &= \frac{2-2t+t+t}{4}V \\ &= \frac{1}{2}V \end{aligned}$$

となり、題意は示された。

【戦略 2】

【解 1】における $s=t$ から何を見出すかですが、この切り分けられた 2 つの立体が全く同じ図形（立体として合同）であると見抜ければ一発です。

直線 PQ を軸として、題意の 2 つの立体を 180° 回転させると

- 点 B が点 A に移る（辺 AB を回転させても不変）
- 点 D が点 C に移る（辺 CD を回転させても不変）
- 点 P は点 P のまま
- 点 Q は点 Q のまま

ですから、あとは R と S の関係を言うことになりませんが、 $s=t$ ということから CR と DS が等しいことになりま

す。上の対応関係から、辺 DA を回転させると、辺 CB に一致し、さらに $CR=DS$ ですから、点 S の回転先が点 R ということになり、これで解決です。

【解 2】部分的別解 【解 1】で $s=t, l=-1$ を得たあと

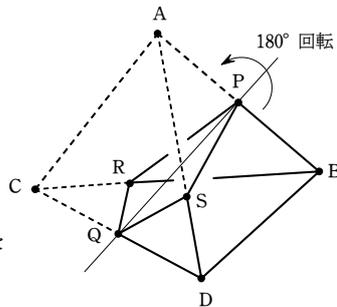
$s=t$ ということは

$$AS : SD = BR : RC = t : 1-t$$

今、 $AD=BC$ なので

点 R, S は長さが等しい 2 つの線分を同じ比率で内分することになる。

すなわち、 $AS=BR$



これより、平面 α によって切り分けられた 2 つの立体

K_1 (図の実線部), K_2 (図の点線部)

について、直線 PQ を軸として、一方を 180° 回転させると他方に重なる。

したがって、 K_1, K_2 の体積は等しい。

【戦略 3】

座標を設定してみます。

ただ、座標設定する際には闇雲に設定するのではなく、労力が最小限になるように設定します。中点の状況、及び (1) の結果から、P を原点、直線 PQ が z 軸、A, B は x 軸上に設定しましょう。

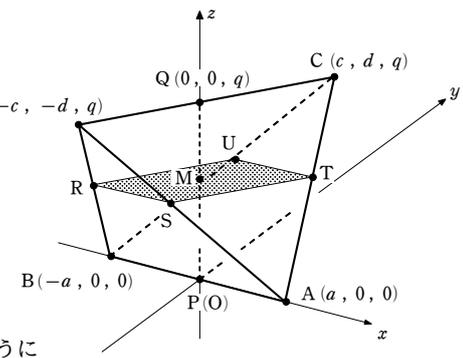
体積を考えると、断面積を考えることになりませんが、どの断面も平面 α によって 2 等分されているということが言えればよいことになりま

【解 3】

右の図のように座標を設定できる。

ただし、 $a > 0, q > 0$
 $c > 0, d > 0$

この四面体 ABCD を $z=k$ で切ったときの切り口の四角形を図のように RSTU とし、この四角形 RSTU と z 軸との交点を M とする。



\vec{OT} について

$$\vec{OT} = (1-t)\vec{OA} + t\vec{OC} \text{ と表せる。}$$

$$\vec{OT} = (1-t) \begin{pmatrix} a \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} + t \begin{pmatrix} c \\ d \\ q \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a-at+ct \\ dt \\ qt \end{pmatrix}$$

T の z 座標が k のときを考えるので、 $qt=k$, すなわち $t = \frac{k}{q}$

$$\text{このとき、} \vec{OT} = \begin{pmatrix} a + \frac{(c-a)k}{q} \\ \frac{dk}{q} \\ k \end{pmatrix}$$

\vec{OU} については \vec{OT} の a を $-a$ に変えればよく、

$$\vec{OU} = \begin{pmatrix} -a + \frac{(c+a)k}{q} \\ \frac{dk}{q} \\ k \end{pmatrix}$$

\vec{OS} については \vec{OT} の c を $-c$ に、 d を $-d$ に変えればよく、

$$\vec{OS} = \begin{pmatrix} a + \frac{(-c-a)k}{q} \\ \frac{-dk}{q} \\ k \end{pmatrix}$$

\vec{OR} については \vec{OS} の a を $-a$ に変えればよく,

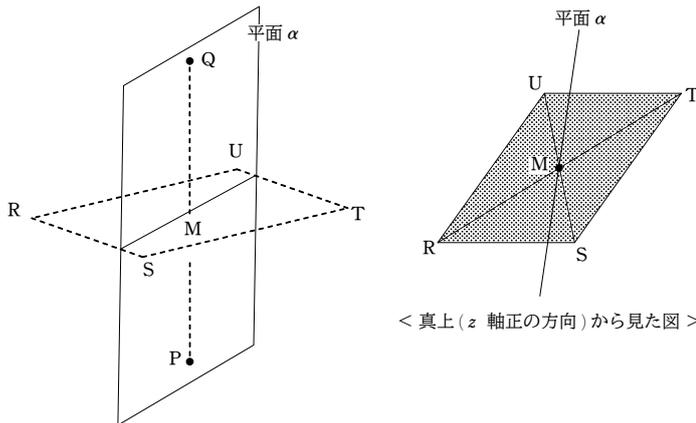
$$\vec{OR} = \begin{pmatrix} -a + \frac{(a-c)k}{q} \\ \frac{-dk}{q} \\ k \end{pmatrix}$$

$$\frac{1}{2}(\vec{OR} + \vec{OT}) = \frac{1}{2} \left\{ \begin{pmatrix} -a + \frac{(a-c)k}{q} \\ \frac{-dk}{q} \\ k \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} a + \frac{(c-a)k}{q} \\ \frac{dk}{q} \\ k \end{pmatrix} \right\} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ k \end{pmatrix}$$

$$\frac{1}{2}(\vec{OS} + \vec{OU}) = \frac{1}{2} \left\{ \begin{pmatrix} a + \frac{(-c-a)k}{q} \\ \frac{-dk}{q} \\ k \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} -a + \frac{(c+a)k}{q} \\ \frac{dk}{q} \\ k \end{pmatrix} \right\} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ k \end{pmatrix}$$

つまり、対角線 RT , US はそれぞれ中点で交わり、その交点が M である。

ゆえに、この切り口は平行四辺形である。



したがって、線分 PQ を含む任意の平面 α と四面体 $ABCD$ の $z=k$ による切り口の平行四辺形 $RSTU$ の交線は M を通る。

四面体 K を平面 α によって切り分けた立体を K_1, K_2 とすると、

K_1, K_2 の $z=k$ による切り口の断面積は、平面 α によって 2 等分されている。

したがって、 K_1, K_2 の体積は等しい。

【総括】

今回考えた 3 路線の中で最も現実的な路線は【解 1】のように「体積比を考え、片方が全体の $\frac{1}{2}$ となっていることを示す」路線でしょう。

【解 2】の「回転によって一致するという合同性を見出す」という路線は見えれば早いですが、その反面思いつきづらいと思います。

【解 3】は

「断面積が常に等しいならば、2 つの立体の体積が等しい」という「カバリエリの原理」

がもとにあります。

時間無制限であればともかく、限られた時間の中では中々難しいでしょう。